

受難節第4主日礼拝説教「覆いを取れば見えるもの」

日本基督教団石神井教会 2019年3月31日

【旧約聖書日課】出エジプト記 34章29～35節

²⁹モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセは、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。³⁰アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかったが、³¹モーセが呼びかけると、アロンと共同体の代表者は全員彼のもとに戻って来たので、モーセは彼らに語った。³²その後、イスラエルの人々が皆、近づいて来たので、彼はシナイ山で主が彼に語られたことをことごとく彼らに命じた。³³モーセはそれを語り終わったとき、自分の顔に覆いを掛けた。

³⁴モーセは、主の御前に行って主と語るときはいつでも、出て来るまで覆いはずしていた。彼は出て来ると、命じられたことをイスラエルの人々に語った。³⁵イスラエルの人々がモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は光を放っていた。モーセは、再び御前に行って主と語るまで顔に覆いを掛けた。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 3章4～18節

⁴わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています。⁵もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。⁶神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。

⁷ところで、石に刻まれた文字に基づいて死に仕える務めさえ栄光を帯びて、モーセの顔に輝いていたつかの間の栄光のために、イスラエルの子らが彼の顔を見つめないほどであったとすれば、⁸霊に仕える務めは、なおさら、栄光を帯びているはずではありませんか。⁹人を罪に定める務めが栄光をまもっていたとすれば、人を義とする務めは、なおさら、栄光に満ちあふれています。¹⁰そして、かつて栄光を与えられたものも、この場合、はるかに優れた栄光のために、栄光が失われています。¹¹なぜなら、消え去るべきものが栄光を帯びていたのなら、永続するものは、なおさら、栄光に包まれているはずだからです。

¹²このような希望を抱いているので、わたしたちは確信に満ちあふれてふるまっております。¹³モーセが、消え去るべきものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、自分の顔に覆いを掛けたようなことはしません。¹⁴しかし、彼らの考えは鈍くなってしまいました。今日に至るまで、古い契約が読まれる際に、この覆いは除かれずに掛かったままなのです。それはキリストにおいて取り除かれるものだからです。¹⁵このため、今日に至るまでモーセの書が読まれるときは、いつでも彼らの心には覆いが掛かっています。¹⁶しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。¹⁷ここでいう主とは、“霊”のことですが、主の霊のおられるところに自由があります。¹⁸わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。

【福音書日課】ルカによる福音書 9章28～36節

28この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。30見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。31二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。32ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。33その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。34ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。35すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。36その声が出たとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

山で祈る

今日の福音書日課で、主イエスは**祈るために山に登られています**。主イエスは、祈るために山に登られることがしばしばあったようです(6:12 参照)。それは、あるいは旧約の信仰者らが山に登って祈り、神との親しい交わりを深めたという故事に倣ってのことだったかもしれません。モーセは、イスラエルの民をエジプトから脱出させると、その足でまずシナイ山(ホレブ山)に向かって登り、神から律法を授かったと伝えられています(出19章以下)。預言者エリヤは、カルメル山でバアルの預言者四百五十人との対決に勝利した後、王妃イゼベルに追われると、やはりホレブ山に逃れて、そこで神から新しい力をいただいたと伝えられています(王下18章以下)。モーセやエリヤに倣って山に登り、祈りのときを過ごす。それは、単に祈りの環境を同じくするというだけのことではなく、モーセの律法を伝え、エリヤら預言者の出来事を物語る「旧約聖書」の御言葉の世界に深く身を置き、神の御言葉を聞くときを過ごすことでもあったかもしれません。

弟子たちの前でご自身の受難を予告されて八日。主イエスは、三人の弟子だけを連れて山に登られました。**祈るために…登られたのですが、むしろこのときは、ご自身の山での祈りを三人の弟子にお見せになるために、そうなさったのでしょ**う。モーセやエリヤに倣って、モーセやエリヤと親しく語り合うようにして祈る姿を、主イエスは弟子たちの前でお示しくださったのです。

神の御前に進み出る礼拝とは、このようなものなのだ、主イエスは弟子たちにお教えくださったのでしょうか。弟子たちは、そのときには分からなかったかもしれません。けれども、この出来事を心に留め続けました。そして、主がお教えくださったことの意味を思い巡らしながら、この出来事を伝えたのです。自分たち神の御前に進み出ることを恐れ、あるいは避け、知らずにいる者を、主イエスは神の御前へとお連れくださる。神の御前に進み出る礼拝に、あずからせてくださる。わたしたちは、この出来事と共に、そう教えられてきたのです。

光を放つ

もちろん、わたしたちは礼拝にあずかるとき、このときの三人の弟子たちのように、ただ傍観者としてそこにいるわけではありません。わたしたち自身が讃美を歌い、祈りの言葉を口にし、聖書の御言葉を語ります。自分自身の信仰と献身のしるしとしてささげものをし、備えられていれば聖餐の食卓に自ら着き、パンと杯にあずかるということもします。その一つひとつを吟味し、わたしたちの為す礼拝が真実のものになることを願って、整えます。たとえ初めて礼拝に加わってくださったという方であっても、できる限りわたしたちと同じように礼拝に加わってもらえるように、ご案内をいたします。会衆席にお座りの皆さんは、牧師が礼拝をしているのを黙って見ていれば良いような見物人でも来客でもなく、全員、主体的に礼拝に参加する者として、ここにいらっしゃるはずです。

そうだとすると、わたしたちがそのような礼拝をすることができるのであれば、それは、あの主イエスが弟子たちを山の上にお連れくださったような出来事があったからです。今も主イエスがまず先導して山に登り、神の御光の近くにまでお連れくださっているからです。どのように祈ったら良いのか知らなかったわたしたちに、祈りの言葉をお教へくださるのは、主イエスです。どのように聖書の御言葉を読むべきかを分かっていたわたしたちに、御言葉の聞き方をお教へくださったのは、主イエスです。

主イエスの祈りに導かれ、主イエスを通して御言葉を聞く。そこから始まる礼拝にあずかるとき、わたしたちは、あの弟子たちと同じように、神の御光に照らされて輝く姿の主イエスを見ているのではないのでしょうか。

山の上で祈られる主イエスを見ていた弟子たちは、その顔の様子が変わり、服が真っ白に輝くのを見ていました。主イエスと語り合っている二人の人、モーセとエリヤもまた、栄光に包まれた姿をしていました。主イエスだけでなく、モーセもエリヤも共に、神の御前近くに立つ者として、その姿を示していたのです。

モーセが神と親しく語らう関係にあったことは、「出エジプト記」以下の書で繰り返し語られています。今日の旧約日課（出 34 章）でモーセの**顔の肌が光を放っていた**というのも、直前に山に登って神にお会いし、顔と顔を合わせてモーセに語られた（出 33:11）主の御光を浴びていたからです。もっとも、モーセは神の顔を見てはいないとも描かれています（出 33:20）、ほとんどそれに近い神の傍にまで近づくことが許されていたということなのでしょう。そのモーセが顔に光を放ったまま山を下りて来たとき、その姿を見た人々は、恐れて近づけなかったと言います。モーセの顔から放たれていた光が、モーセ自身の光ではなく、神の光であったからこそ、恐れずにはいられなかったのでしょう。モーセは、それで、人々の前では顔に覆いを掛けるようにしたというのです。

主イエスは、山の上でモーセやエリヤと共に神の栄光に輝く姿をお見せになりました。弟子たちは、その姿を見ました。その光り輝く様子は、山を下りた後は、どうなったのでしょうか。弟子たちも、何とも反応を示していません。いつのまにか主イエスの放っていた光は輝きを見せなくなってしまったようにも思えますが、福音書には何とも語られていません。弟子たちの目にはもはや、主イエスの姿は光り輝いて当たり前のもとなっていた、ということなのでしょう。

覆いを除かれる

キリストを信じる者にとって、主イエスが光り輝くお姿であることは、もはや当たり前のごとくに思えます。福音書のどの場面のお姿であろうと、わたしたちは、主イエスを光り輝く姿で描かれることに、さほど抵抗はないでしょう。もちろん、ご受難の主イエスのお姿が、およそ光を失い、輝くものがない様に描かれたからといって、抵抗するわけでもありません。しかし、そのようなご受難のお姿の中にさえ、わたしたちは無意識のうちに光り輝く主イエスのお姿、光を放つ主イエスの御顔を、見ているのではないのでしょうか。

もちろん、そのようなお姿の主イエスを、だれもが思い描くわけではないでしょう。主イエスをキリストと信じることのない人、普通の人間としか見ない人は、福音書がどのように描こうとも、そこに主イエスの光り輝くお姿を見出すことはないかもしれません。主イエスの栄光のお姿というのは、その意味では、客観的な事実を言っているのではないのです。

それでも、わたしたちは、主イエスのお姿のうちに光り輝くものを見えています。光を放つ主イエスの御業、その御言葉を、わたしたちは見出します。それを見たからこそ、わたしたちは、主イエスに従う歩みを続けてきたのです。このお方と深く結びつき、その御光にあずからせていただきたいと、願ひ続けています。

それは、わたしたちがそうありたいというだけのことでないでしょう。わたしたちは、周囲の人たちにもそうであってほしいのです。主イエスのお姿のうちに光を見出し、光り輝く主イエスを見る者となり、その主イエスに導かれて共に神の御前に進み出る者となってもらいたいとのです。

わたしたち自身が、いつからそのような者になったのかを、思い起こしてみたいのです。最初から主イエスのお姿を光り輝くものとして見ていたわけではなかったでしょう。一人の人としての姿にしか見えなかったのです。けれども、その主イエスが、わたしたちをお連れくださり、その御言葉や御業に触れさせてくださることを通して、山の上での祈り＝礼拝に立ち合わせてくださることを通して、その御光の姿に気づかせていただけるようになったのです。それは、わたしたちの眼前に掛けられていた覆いが取り除けられて、突然、輝く光を目の当たりにするような経験だったかもしれません。

ただ、わたしは、もっと正直に証ししたいのです。わたしたちは、主イエスの光り輝く御顔を、直接には見ていないのかもしれませんが。その代わりに、別の光り輝く者を見たのです。主と同じ姿、主の栄光を映し出す姿に変えられた人を、わたしたちは見させていただいた。それは、パウロが使徒書日課（Ⅱコリ 3 章）で言うように、わたしたち皆のごとです。**わたしたちは皆…鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。**

自分の顔が神の栄光を帯びて光り輝いている、とは思えないかもしれません。モーセもそうでした。気づかなくてもよいのです。傲り高ぶらないためです。けれども、わたしたちは、互いの姿の中に主の御光の輝きを見ることはできます。主の霊がお働きくださるとき、わたしたちの顔の覆いは取り除けられて、見えるようになるのです。だから、わたしは、あなたと共に礼拝にあずかります。神の御前に、御光の輝くところに、共に居させていただきたいのです。